

日本における人痘接種の意義

酒井 シヅ

順天堂大学医学部 医史学研究室

天然痘予防法には人痘接種法（人痘法）と牛痘接種法（牛痘法）がある。現代の種痘は牛痘法に由来するものであるが、種痘は歴史的には人痘法に始まる。人痘法は西アジアと東アジアではそれぞれ地域によって独自の発展を遂げている。西アジアのものがヨーロッパに伝わり、ジェンナーの種痘法の発明につながった。一方、東アジアは中国が中心になり、独自の発展を遂げた。それが日本に伝わったのである。

両者には種苗と接種法に重要な相違点がある。西アジア系は痘苗に痘漿を用いるが、中国は主に痘痂を用いた。接種は、前者では腕に傷をつけて塗布したが、後者では鼻腔に痂の粉末等からなる痘苗を吹き込んだ。

中国の人痘法は明代に民間ですでに行われていたといわれる。ついで種痘書が著され、清代になると、康熙帝の擁護を受けて、発展し、種痘書が相次いで出版された。その後、中国では人痘法が安全なものになり、19世紀、日本で牛痘法が普及した後も続いた。

中国から日本にはじめて人痘法を伝えたのは、延享元年（1744）に長崎に来た清代杭州の人、李仁山といわれる。李仁山は長崎で人痘法を行い、奉行の依頼をうけて種痘法を教えた。弟子には、大村藩の堀尾玄育、琉球の上江州論言（1732-1812）、福井藩の都築孟義（1754-1826）らがいる。李仁山が長崎にいつまで滞在したのか不明であるが、長崎で学んだ弟子は人痘法を郷里で行い、効果をあげている。中でも大村藩では、藩独特の種痘山を経営して、人痘法が実施された。

人痘法を大々的に行ったのは秋月藩の緒方春朔（1749-1810）である。緒方春朔は李仁山の来日より遅れて長崎で人痘法を学び、研究を重ね、人痘法を習得し、『種痘必順弁』など人痘法の種痘書を著した。春朔の記録によると、春朔の門人は、九州だけでなく、江戸や全国各地の藩から入門している。人痘法は確実に普及していたのだ。

一方、ジェンナーの牛痘法の情報が日本も伝わったのは19世紀初頭であった。長崎出島の蘭館長ゾーフが幕府に出した風説書に記していた。すでに緒方春朔らの人痘法が行われていたあとである。人痘法に勝るといふ、牛痘法の情報は、その後引き続き伝わり、シーボルトも牛痘法を教えたが、痘苗が腐敗していたために成功しなかった。それだけに蘭学者の間で牛痘法への期待が高まった。

日本で牛痘法が成功したのは嘉永2年（1849）であった。牛痘法は、その直後から全国に急速に普及した。佐倉藩では同年12月に牛痘法を天然痘未患児にすすめる触書が出ている。その中に「これまでの人痘と違い季節の寒暖、子供の年齢などに関わりなく安全である」と述べる。佐倉で人痘法が行われていたことを示す。佐倉藩医佐藤泰然は天保6年（1835）に長崎留学したときに、長崎でジェンナーの種痘法を学び、『痘科集成』を著している。泰然自身、痘苗に人痘を使って、牛痘法の接種法で次男良順などに種痘している。

嘉永2年、牛痘法が始まったとき、蘭方医だけでなく、漢方医も種痘に参加した。また、牛痘法が懐疑ももたれず、正統な評価が行われ、全国に迅速に普及したが、それは李仁山が人痘法が実践してから95年経ち、緒方春朔の人痘法が全国各地で実施されて、効果を上げていた事実を無視できない。また、牛痘法が信頼されて受容できたことは、その後の幕末にかけて蘭学が速やかに受容されたことに繋がっているといえる。